

[研究ノート]

台湾映画『KANO』の語り

Message in *KANO* ; Taiwanese film

小 野 純 子

Junko Ono

Studies in Humanities and Cultures

No. 25

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 25号
2016年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JANUARY 2016

〔研究ノート〕

台湾映画『KANO』の語り

Message in *KANO* ; Taiwanese film

小 野 純 子
Junko Ono

要旨 2014年の台湾映画『KANO』は、野球を通して民族を超えた友情を描き、日本でも評判となった。日本の各映画評では注目されていないが、この映画には球児らが活躍半ばで出征して戦死するという、日本の戦前野球史の記憶の語りと同じものがある。本稿では第1章を台湾映画『KANO』の語りとし、‘嘉義農林’、‘日本語’、‘三民族混成’、‘八田與一’の4つのキーワードについて言及する。第2章では、台湾映画『KANO』の中で統治の様子と軍事動員がどのように語られているかについて論じる。本稿は日本統治時代、台湾における軍事動員の記憶を明らかにするための第一段階である。

キーワード：台湾映画、統治、野球¹、軍事動員

はじめに

「知っていましたか。かつて甲子園に台湾代表が出場していたことを。」これは1930年代の甲子園台湾代表をテーマにした映画『KANO』の広告フレーズである。『KANO』は、台湾で大ヒットした「海角七号 君想う、国境の南」、そして抗日事件を描いた「セデック・バレ²」等の代表作で知られる監督、魏徳聖氏がプロデューサーとなり、日本統治時代の台湾から全国中等学校野球大会に出場し、準優勝した嘉義農林学校（以下、嘉農と記す）の活躍を描いた映画である。この作品は2014年に公開され、台湾で異例の大ヒットとなり、多くの映画祭にも出品され、賞も獲得した。世界でも歴史ある映画賞の一つである第51回金馬奨では、最優秀作品賞、主演男優賞（永瀬正敏）、新人賞（曹佑寧）、新人監督賞（馬志翔）、衣裳デザイン賞、オリジナル楽曲賞、の主要6部門にノミネートされ、観客賞と国際映画批評家連盟賞の2つの賞を受賞した³。

台湾での公開から一年、満を持して2015年春、日本で『KANO～1931海の向こうの甲子園～』として公開された。野球を通して民族を超えた友情を描いた作品として、日本でも評判⁴となった。

さて同時期の日本野球史の語りと記憶はどのようなであろうか。日本では、戦場に散ってしまう

た球児についての著書が一般書店でも容易に入手可能である。本稿においては、早坂隆（2014）『戦場に散った野球人たち』から、1931年の嘉農が準優勝した第17回大会準決勝の対戦相手である小倉商業の選手で、巨人軍第一期生でもあった新富卯三郎について引用する。本書の新富に関する記述において、嘉農についても触れられている。

ベスト4まで順当に勝ち進んだ小倉商業だったが、準決勝では台湾代表の嘉義農林に2対10で敗れた。当時の甲子園大会には外地の台湾や朝鮮からも代表校が出場していた。嘉義農林は日本人と台湾人、更に高砂族から成る混成チームだったが、勝ち進むごとに注目を集め、同大会に爽やかな「台湾旋風」を巻き起こしたのである⁵。

新富は小倉商業で春夏合わせて5度甲子園に出場し、強打者として活躍した。卒業後、実業団を経て、大日本東京野球倶楽部（現在の巨人軍の母体）に入部する。しかし1936年に兵役のために巨人軍を退団した。1939年、無事に兵役を終え、再び野球の世界に戻った。しかしながら、1941年に再び招集され、ビルマへ派遣され、敷設されていた地雷を踏み亡くなった。小倉商業で活躍し、巨人軍第一期生でもあった新富は、あまりに悲しい最期を迎えたのである⁶。

このように戦前の日本では、戦地に行かなければならなかった元甲子園球児たちが多くいた。甲子園大会も、戦争が激化していくにつれ兵士の育成の場と化していく。甲子園大会の開催を告げる朝日新聞の社告にも、「中等学校生徒の錬成と団体訓練の強化」を目的にあげ、「現下、未曾有の重大事態にかんがみ、少年学徒の心身鍛錬に寄与」とすると、戦時を強く意識したものとなった⁷。早坂（2014）では7名の野球人たちについて語られている。映画『KANO』において登場する選手らと同世代の日本人球児にはこのような運命を辿った者がどれだけいたのだろうか。

台湾では、戦前の野球についてこの映画を通して最近周知されるようになってきた。では、台湾野球史において、戦前の日本野球史のように活躍半ばで徴兵され、出征し、戦死をするといった語りはあるのだろうか。本稿の第1章では、台湾映画『KANO』が何を語っているのかを4つのキーワードから論じる。第2章では、台湾映画『KANO』の語る統治と軍事動員を中心に論じる。‘三民族’だけではなく、映画『KANO』を軍事動員という視点から論じる。

ここで先行研究について言及する。日本語文献として、川西玲子（2014）『戦前外地の高校野球 台湾・朝鮮・満州に花開いた球児たちの夢』では、台湾を軸として満州、朝鮮も含め、戦前の中等野球史の貴重な資料を振り返っている。高校野球の始まりから、戦前の統治下での野球の発展、戦争が激化していく中、球児たちに迫る戦火、そして戦後の外地野球についても論じられている。戦前から戦中の外地の様子を、高校野球という切り口から見ることができる。幅広く戦前の台湾野球について論じており、『KANO』については、台湾人監督によって映画化され、最初で最後かもしれない脚光を浴びているとし、映画自体は、台湾で近年高まっている自分探しの

一環として、制作されたものであるものの、これは、日本人が戦前外地の高校野球について知る、またとない貴重な機会になるのではないかと論じている。しかし現代台湾や映画『KANO』の公開から盛り上がる嘉義の視点からの記述はあまり見られない。

戦前の台湾の野球史をまとめたものは以下の3点⁹があげられる。

① 湯川充雄編『台湾野球史』（1932年 台湾日日新報）

編者である湯川充雄は、1910年9月に開催された中学会主催の台北野球大会に出場している。現役を退いて北部野球協会の理事になってからは、裏方となって台湾野球界を支えていく。初期の台湾野球史の生き字引ともいわれている¹⁰。本書は1932年までの台湾の野球発展について著されている。

② 竹村豊俊『台湾体育史』（1933年 台湾体育協会）

本書は、台湾の体育の普及と発展のために作られたもので台湾体育協会の成立10周年の記念として出版された。

③ 西脇良朋『台湾中等学校野球史』（1996年 自費出版）

本書は映画『KANO』の日本公式ホームページの作品紹介、解説部分においても参考として用いられている。中等野球の代表に関して書かれており、口述資料としても貴重な史料である。

また日本公開時に販売された『KANOーカノー1931海の向こうの甲子園』パンフレット、歴史的背景も先行研究となり得る。早稲田大学アジア研究機構台湾研究所、客員上級研究員である春山明哲氏により執筆された。歴史的背景は、【1】台湾の歴史と民族、【2】日本統治下の台湾、【3】嘉農ができるまで、【4】「三族共学」の嘉義農林誕生、【5】「KANO」甲子園への道、【6】甲子園が観た嘉義農林の野球、【7】戦後の日台関係の中のKANOと7つに分けられ、日本統治前の台湾の歴史から、嘉義農林学校誕生、KANOの甲子園までの道のりそして選手たちのその後についてまとめられている。本稿でも春山氏の歴史的背景を多く参照する。

中国語文献では、謝仕淵氏の研究が先行研究となりうる。台湾野球を研究した謝氏の博士論文「帝国の体育運動と植民地の現代性：日本統治時代台湾野球運動研究」（2011）や博士論文をベースに詳しくまとめた『国球 誕生前記 日治時期台湾棒球史』（2012）が代表的である。また、謝氏は映画内でも登場する1931年甲子園に台湾代表として出場した蘇正生¹¹氏をはじめとし、日本統治下の台湾において教育を受けた野球経験者への口述記録『日治時期台湾棒球 口述訪談』（2012）もまとめている。

その他、嘉義大学校友会が出版している『嘉農人』（1997一）を中心に、嘉農の後身である嘉義大学でも研究が盛んだ。

本稿にあたって、筆者は2015年4月24日に嘉義大学で実施された「2015棒球口述歴史研習營」

に参加した。その際に嘉農野球部OBである蔡清輝氏から頂いた『永遠的嘉義農林/嘉義大学 KANO棒(野)球魂』（嘉義農林KANO野球部OB会出版）2014も参考とする。

第1章 4つのキーワード

はじめにでも紹介したが、台湾映画『KANO¹²』は2014年に台湾で公開され大ヒットした。1931年、台湾から甲子園大会に出場し、一大旋風を巻き起こした嘉農野球部の実話である。同映画は台湾で感動を呼び、海を越えて日本でも熱い感動を呼んだ。

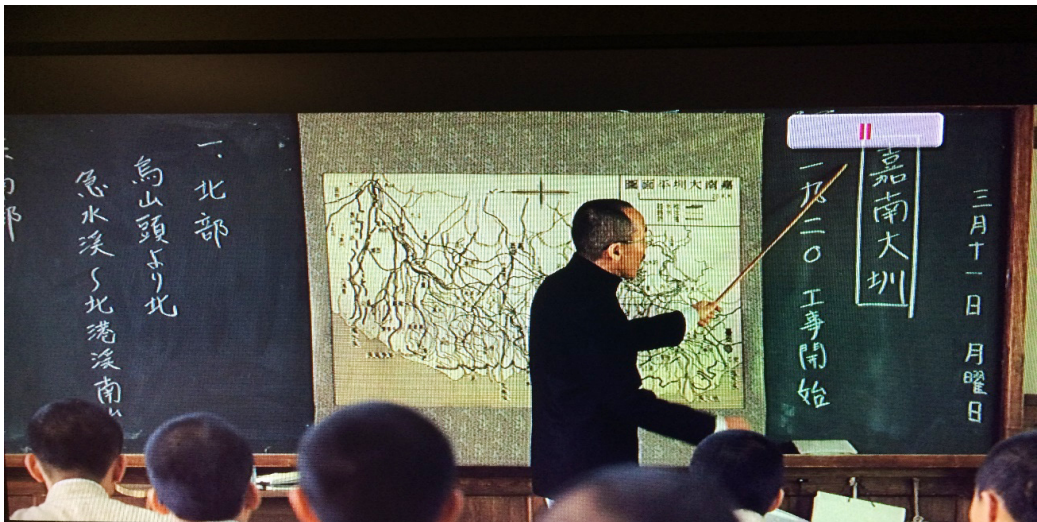
台湾は1895年より約50年に渡って日本の統治下にあった。統治下の台湾では同化政策がとられ、日本語教育が行われた。映画の舞台である1930年代の台湾での日本語の普及率は、10%程であったが終戦間際には、都市を中心に70%を超えていた。本作品の舞台は、現在であれば台北から台湾高速鉄道で1時間、在来線の台湾鉄道で3時間強かかる位置¹³にある嘉義だ。そのような嘉義の学校を舞台とした映画において、嘉農、八田與一、日本語、三民族混成という4つのキーワードがある。嘉農の活躍に、八田與一という人物を絡める形で映画は1930年～40年代の嘉義を舞台に進められる。以下より、映画が何を語っているのか4つのキーワードについて言及する。

映画は日本統治時代に実在した嘉農（現在の国立嘉義大学）を舞台に進められる。嘉義農林の略称が嘉農（KANO）である。嘉農は、1919年に台湾人の中等教育の拡充を図って本島人を対象とし誕生した農林学校である。設立当初、嘉農の学生のうち日本人学生は少数であったが、1920年代中期ごろには増加していった。野球部は1928年4月に設立され、初代野球部部長は濱田次箕であった。1930年に濱田が松山商業出身であった近藤兵太郎に監督を依頼した¹⁴。嘉農は1931年～1936年の間に5度台湾代表として甲子園に出場した。1931年の甲子園準優勝は台湾野球の最も輝かしい成績である。日本人、漢人、高砂族という三民族混成のチームは珍しく注目を集めた。映画の中では、嘉農の生徒らは、授業を受け、農業実習をしながら野球の練習に励む姿が描かれている。実際の嘉農の野球部の記録によれば、歴代の選手は、台湾人47名、原住民22名、日本人50名であった。1931年準優勝メンバーの詳しい割合は、三民族の部分で紹介する。

まず八田與一に関する描写である。八田は、日本統治時代の台湾で、台湾南部の嘉南平野に水利施設と鳥山頭ダムを建設し、作物の生育が難しい嘉南平野を穀倉地帯へと変貌させた。台湾では知らない者がいないと言われる日本人土木技師である。鳥山頭ダムの建設は、統治の中でも重要な社会政策の1つであった。八田が、田んぼの中を車で走っていくシーンをはじめ、嘉農の生徒達が学校で授業を受けているシーンでも授業の内容は嘉南大圳に関するものであった。八田が放流するダムのシーンや畑の隅々にまで水が通る感動シーンもある。プロデューサーであり、脚本も担当した魏徳聖によれば、八田と嘉南大圳のことは台湾でもよく知られている史実であり、以前から映画化したいと思っていたが、それだけで一本の映画にするのは難しいため、本作で融

合したようだ¹⁵。

八田與一の功績は、日本統治の歴史の中でも大きく、台湾では広く知られている。現在、鳥山頭ダムを訪れると、八田の銅像を見ることができる。台湾では戦後、日本統治時代の人物を崇めることができない状況であった。そのためこの銅像は、管理組合である嘉南農業水利会の事務所2階に保存されていたという。時が来るまで秘蔵し、今では鳥山頭ダムに飾られており、毎年八田の命日には慰霊祭も行われている¹⁶。この事実からも、八田與一は台湾では知らない人はいないとまで言われるほど有名であることがわかる。この映画を野球映画と括った場合において、八田の登場には必然性があるとは言い難いが、八田は1930年代の台湾、特に南部の発展に大きく貢献したため、歴史野球映画である本作のテーマの1つとなっている。先行研究で挙げた映画『KANO』のパンフレットの歴史的背景を執筆した春山氏は、「嘉南大圳」は、鳥山頭ダムと嘉義、台南の平野部の水利灌漑施設からなる大規模プロジェクトであり、台湾総督府技師の八田與一が全精魂を傾けて監督指導した大土木工事であった。この主要工事は10年余の歳月をかけて1930年4月に完成し、水の提供も開始されたが、映画の中で、ダムの完成と嘉農の全島大会優勝の時期を重ねているのは、南部台湾人への演出でもあるだろうと指摘している¹⁷。



（嘉農の授業内容：嘉南大圳、八田與一¹⁸）

次に‘日本語’である。台湾で大ヒットした映画『KANO』は、台湾映画であるが、映画内で使用されている言語の80%以上が日本語である。その他に、台湾語、客家語、原住民語なども使われているが、3時間を超える映画のほとんどが日本語の会話だ。筆者自身、台湾公開時に映画を鑑賞したが、ここは本当に台湾なのか、日本映画を見ているのではないかとさえ感じるものであった。特に、嘉農野球部の生徒たちの会話の大部分が日本語であった。嘉農野球部員役の生徒

たちをはじめとしてキャスティングされた役者は、それまで話したことのなかった日本語を一から学び、また古い台湾語も覚え演技に挑んだようだ。日本語以外には、生徒（漢人）同士、家族間での会話は台湾語が、またワンシーンのみであるが原住民の生徒同士の会話においては原住民語が使用された。原住民語が使用されたシーンにおいては、中国語字幕に（原住民語）と表記された。映画の中で三民族の言語が示され、特に「日本語」は本作におけるテーマの1つであると捉えることができる。



（原住民アミ族の平野、真山の会話シーン¹⁹）

台湾総督府が、統治初期より力を入れたのが、国語としての日本語の教育であった。統治開始直後より、国語学校²⁰を開設し、また台湾人向けの公学校²¹や原住民向けの蕃人公学校²²なども開設した。前述の春山氏によれば、国語普及状況は、1905年に「国語を解する本島人」はわずか1万1,270人であったが、1920年には9万9,065人、1930年には、「国語を解し、且つ読み書き得る者」は31万9,233人（うち女子6万183人）であった。当時の嘉農は中等教育機関であった。日本人優位の他学校に比べ、台湾人が多く合格していた学校ではあったが、統治時代、中等教育を受けることは一般の台湾人にとっては狭き門であった。日本人教師もおり、日本語での授業が行われ、日本人学生との交流もあるという環境の中での野球部であった。

そして最後に‘三民族混成’である。この‘三民族混成’は映画の中の中国語字幕では、‘鷄尾酒’＝カクテルと表記されたたびたび登場する言葉である。

筆者自身、この映画の中で特に印象が残っているシーンの1つに次のようなやりとりがある。甲子園出場を果たし、快進撃を続ける嘉農の選手に対して、日本人記者が「野蛮な高砂族は日本語が理解できるの？ニ、ホ、ン、ゴ、わかる？」という差別意識むき出しの発言をしたシーンである。当時は台湾の大会でも、出場したチームのほとんどは台北のチームで、またその大多数が日本人で占められていたのだが、嘉農は日本人、漢人、高砂族の混成チームであった。以下参考に1931年のメンバーを紹介する。²³

呉明捷	(投)	漢人
東和一（藍徳和）	(捕)	原住民 アミ族
小里初雄	(一)	日本人
川原信夫	(二)	日本人
真山卯一（拓弘山）	(三)	原住民 アミ族
上松耕一（陳耕元）	(遊)	原住民 プユマ族
平野保郎（羅保農）	(左)	原住民 アミ族
蘇正生	(中)	漢人
福島又男	(右)	日本人
崎山敏雄	(補欠)	日本人
里正一	(補欠)	日本人
谷井公好	(補欠)	日本人
積真哉	(補欠)	日本人
劉蒼麟	(補欠)	漢人

こうした多民族混成チームが甲子園に出場したこと自体が極めて異例なことであった。練習はおろか意思疎通さえ図れないのではないかという懸念の声もあった。映画の中で近藤は、「高砂族の選手は足が速い。漢人の選手は打撃が強い。日本人の選手は守備に長けている。それぞれの長所を組み合わせれば強力なチームになる。野球に民族などは関係ない」と答えている。

三民族混成に関する指摘は、映画の中だけではない。たとえば語り部の語りでも特に重視されているキーワードである。以下に1931年の準優勝メンバーで最も長命であった蘇正生の口述記録を引用して紹介する。

・開幕式に参加したとき、私たちは一番最後に入場した。入ると彼らはすぐに大きな声を出していた。私たちは何かととても興味を持った。後でやっと知ったのだが、彼らは嘉農の選手をみて、みな個々人背が高く、筋肉があり、また皮膚が黒く（練習で）、台湾からやってきて、さら

に台湾人、高砂族及び日本人の三民族の連合軍で、今までになく、日本の野球ファンを新鮮な気持ちにさせ、熱烈な喝采を受けた。(『嘉農人』創刊号より)

また当時のアサヒスポーツ²⁴のある一面にこのような表記が見られる。

○…略…本島、高砂族、邦人の三種族の混合軍といふ異色ある嘉義の登場と気品ある神奈川の試合振りは尊ぶべきものであった。(P29 久保田記)

嘉農の甲子園での第一試合は一躍大会の寵児となった嘉義と題してスポーツ新聞に掲載された。映画の中でも、それまで注目度が低かった嘉農が勝利したことで、多くの記者があわててインタビューに向かう場面があった。

三民族については当時の新聞でも特記され、メンバーの回想の中でも印象に残っている思い出の1つとして語られている。また、はじめに挙げた早坂隆(2014)『戦場に散った野球人』でも嘉義農林は日本人と台湾人、更に高砂族から成る混成チームだったと記されていた。三民族は本映画のそして嘉農の栄光を語るうえで最も重要なキーワードだろう。

第2章 統治と軍事動員

『KANO』では、第1章で論じたキーワードを中心に1930年前後～1940年代の台湾社会が描かれている。本章では、1930年代から戦争末期にかけての嘉義市内の風景の移り変わりとまた戦地へ向かう台湾人の描写について分析する。

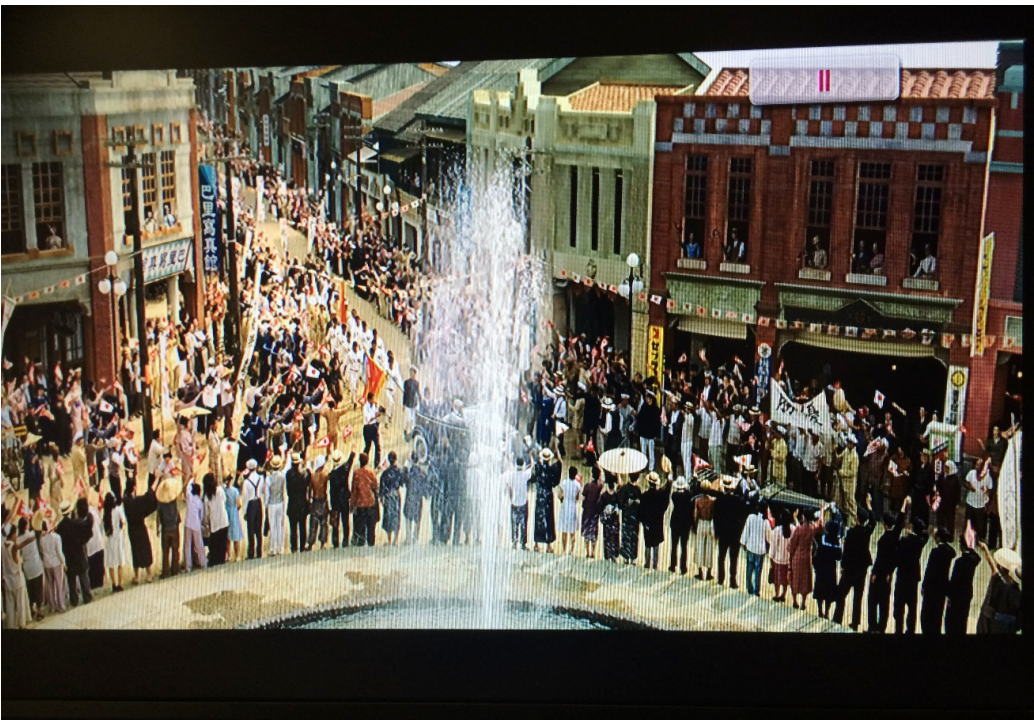
映画の中で登場する時代は、1930年代前半と1944年であり、嘉義市内の風景も大きく変化する。1930年代の嘉義市内は、日本統治の色に染まりつつも、ゆったりとした台湾らしい時間が流れているように表現されている。人々が生活する街中では、台湾語が使用され、日本語の表記も疎らな様子であった。また書店の主人が、ラジオを買い、そのラジオを通して甲子園を応援するという場面からも日本の物が徐々に台湾社会に浸透していく姿がわかる。

しかし、映画の途中、1944年のシーンに移り変わるとその風景は一変する。嘉義の中心部には、国家総動員、国民精神と書かれた旗が掲げられ、嘉義市内の様子もどこか緊張に包まれた慌ただしい一面が表現されている。

映画では、日本人、漢人、原住民の甲子園球児らが切磋琢磨し、また同じく市民も一緒になり、ラジオ中継の音に集中し、一生懸命嘉農を応援する一致団結した様子さえ読み取れるシーンから、戦争が激化するにつれ、そこに台湾人が取り込まれて行く様子が表現されている。以下に映画の1930年と1944年のシーンを切り取ったものを参照として載せる²⁵。



(1930年前後嘉義市内①)



(1930年代嘉義市内② 嘉農、本島大会優勝パレード)



(1944年嘉義市内①)



(1944年嘉義市内②)

本作の中では、嘉農の輝かしい甲子園までの道のりや、八田與一のダム建設という台湾の発展に大きく貢献した史実を取り入れながらも、嘉農が準優勝した1931年の前年、1930年に起こった霧社事件への描写も忘れてはいない。

霧社事件の内容に関することは映画の中でほとんど表されていないため、以下の2点にまとめることができる。

- ① 甲子園で1勝目をした嘉農に対して記者がインタビューで‘野蛮な高砂族は’と発言する。
→ ‘野蛮な高砂族’とは前年、抗日事件を起こした原住民を指しているのではないか。
- ② 錠者選手が、嘉義駅に立ち寄りシーン。カメラで抜かれる額に太い黒い線をいれた南方へ向かう台湾人兵士。
→このような入れ墨は、セデック族やタイヤル族に見られる入れ方である。

①については、第1章のキーワードの部分でも言及したが、当時の台湾大会の出場チームのほとんどは台北のチームで、またその大多数が日本人で占められていたのだが、嘉農は日本人、漢人、高砂族の混成チームであった。原住民への呼称として‘野蛮な’と付け加えることで、霧社事件への描写を含ませているのではないだろうか。

②については、1944年甲子園で嘉農と対決し、敗れた札幌商業の元エース錠者²⁶が、兵士となり、南方への移動途中嘉義へ立ち寄るシーンがある。映画が始まって1時間50分過ぎた頃、錠者は嘉義駅に到着する。嘉義駅の中では、一緒に南方へ向かう台湾人が整列し、列車へ乗り込む準備をしている。このシーンでは、一人の兵士を中心にカメラが動いている。その人物とは、額に黒く太い線を入れた人物である²⁷。この入れ墨は、セデック族やタイヤル族に見られる入れ方である。たくさんの台湾人が整列するシーンで、なぜ彼がカメラで抜かれたのか。これは1930年霧社事件で抗日蜂起したセデック族が、太平洋戦争下、高砂義勇隊として南方で日本に貢献していく姿を表現しているのではないだろうか。

以上の2点は筆者が考える霧社事件に関する描写である。2点のシーンの裏に霧社事件が隠れているとは断言できないが、‘野蛮な’と付け加えられた点、目線に合わせてカメラで抜かれている点には意味があるだろう。

台湾公開時には、「日本時代を美化している」や、また一部では「魏は、KANOを撮ったことで、セデック・バレを忘れたのか²⁸。」などという批評があった。しかしながら、3時間を超える映画の中で、1944年のシーンは5分程度であり、南方に向かう台湾人が映るのはたった数秒のシーンではあるが、そこには日本統治時代の影もしっかりと描写されているのではないだろうか。映画『KANO』では、歴史映画というカテゴリーの中で、霧社事件や軍事動員についても描写され、語られている。

では、実際の台湾における軍事動員はどのような状況であったのだろうか。以下より簡単にまとめる。

日本統治当局による台湾人の軍事動員は1937年に始まった。近藤正己（1996）『総力戦と台湾

『日本植民地崩壊の研究』によると、盧溝橋事件で日中の戦端が開かれ、戦闘地域が「北支」から「中支」に拡大した。中国側の頑強な抵抗に遭遇した日本軍は、増強部隊として台湾軍に動員を命令した²⁹。

この時、集められたのが軍夫である。軍夫は、軍中の雑役をこなした。軍夫についての指摘は、近藤正己（1996）においてなされている。それによれば、軍中央は軍夫を「軍人軍属外ノ者」と規定した。「軍人・軍馬・軍犬・軍属」といわれ身分秩序が絶対であった日本軍の中では、軍夫はこの最下層の軍属の範疇にも入らない文字どおりの最底辺に位置づけられた存在であった。やがて太平洋戦争となり軍夫の名称が「台湾特設労務奉公団」、「台湾特設勤労団」、「台湾特設農業団」と変化したものの「軍人軍属外ノ者」という身分は変わらなかった³⁰という。このように軍夫は正式な軍人とはみなされていなかった。軍夫の身分については、日中戦争から太平洋戦争下に至っても変化することはなかったが、台湾人の身分が変化していくきっかけとなったのが、台湾で実施された志願兵制度、そして終戦間際に実施された徴兵制度である。

日本の台湾植民地政府が台湾人を本格的に動員し始めたのは、1942年の志願兵制度からである。志願兵制度とは軍人の徴募制度の1つで、国民に軍務を服する義務を課す徴兵制度とは異なり、当人の自由意思に任せる制度である。台湾における志願兵は、台湾で初めて「兵士」として採用された人々である³¹。その中には、元球児が多く含まれていたのではないだろうか。しかし例えば1931年準優勝メンバーで動員されたのは日本人の2名のみであり、台湾人に関する詳細は不明である。

実際に戦争がスポーツ（ここでは野球）に及ぼした影響についても少し触れると、戦局の悪化で軍事動員を図るために全国のスポーツ大会が取りやめになり、甲子園としての記録がない幻の甲子園³²が行われたのは、1942年である。この時代になると、戦争が激化し、球児たちにも影響を及ぼし始めていた。内地では野球部の解散が相次いだ。それは統治下にも同じく影響し、いち早く朝鮮はその影響を受けた。しかし、台湾はそのような状況に比べると比較的スポーツの制限は少なかった。内地はもちろん、戦火の止まらない大陸や地続きで緊張感の漂う朝鮮とは少し違う雰囲気だった³³。内地や統治下のこうした事情もあり、1936年以降嘉農は甲子園出場を果たしていない。この時代になると、嘉農野球部の選手らも戦争へと駆り出されていく。以下に嘉農野球部OBである蔡清輝氏の体験記より引用する。

・空襲に明け暮れた私たちは1945（昭和20）年の新年を迎えましたが戦局は悪化をたどるばかりでした。米国の台湾上陸に備えて全島の中等学校最高学年の4年生に対して学徒動員は発令され、憂いはさらに濃くなるばかりでした。「命（みこと）」部隊³⁴の隊長は入隊式で嘉義中学の運動場に集合した市内の中等学校生－嘉義農林と嘉義中学－を前にして、「諸子らは全員特攻隊員である。嘉中隊には夜間斬り込み、嘉農隊には対戦争撃滅の任務を与える」と命令した。（『永遠の嘉義農林／嘉義大学KANO棒（野）球魂（嘉義農林KANO野球部OB会出版）2014』p.42「時空を超越した私の嘉農精神体験記」より）

この蔡氏の体験記と話によれば、戦争末期1945年ごろの嘉農の生徒の多くは学徒兵として招集されていたに違いない。同世代の嘉農卒業生である劉萬来氏の著書でも、私たちは命部隊嘉農隊に配属され、埔庄龍山脚に駐屯し、国語（日本語）講習所で寝泊まりした³⁵という記述がある。甲子園出場選手の時代からは少し遅れるが1945年前後に命部隊に嘉農の学生たちは取り込まれていったという事実は残っているようだ。



（元札幌商業のエースだった錠者が嘉義駅に到着し、駅のホームから外に出るシーン ①）



（元札幌商業のエースだった錠者が嘉義駅に到着し、駅のホームから外に出るシーン②）

本稿ではこの日本兵と台湾兵のシーンに着目したい。野球をメインとした映画である『KANO』にこのようなシーンは必要だったのだろうか。映画は元札幌商業のエース錠者が南方へ向かうために台湾に立ちよることによって、1930年代と1940年代を跨いでいる。蘇正生口述（蔡武璋整理）に以下のような記録がある。

昭和6年（1931）那支來自台灣嘉義的棒球隊，當時造成的轟動，在日本人心中所留下的印象是難以抹滅。二次大戰期，日軍從基隆港上岸，整裝搭火車到高雄，準備往南洋遠征時，火車上的日本兵都會互相提醒，到嘉義別忘了多看一眼；日本兵為甚麼獨鍾情於嘉義？因為他們想看什麼樣的地方，能培育出嘉農這樣的隊伍。³⁶

昭和6年（1931）台灣嘉義から来た野球チームは、当時、日本中を響き渡らせ、人々の胸を打つ忘れられない記憶として残った。

第二次世界大戦期間、日本軍が基隆に降り立ち、装備し高雄より南洋遠征に向かう準備をするなか、列車内の日本兵は皆お互いに嘉義を見逃さないよう注意し合った。確実にそれぞれの目に留めようとしていた。どうして日本兵は嘉義にそのような強い思い入れがあったのだろうか。それは戦前の1931年、嘉農、台湾嘉義の高校野球チームが甲子園の一戦で、全日本を轟かせたからである。

これが前述した映画の序盤、元札幌商業のエース錠者が南方の戦場に向かうために、台湾基隆から高雄へ行く（南方へ行くため）シーンに相当する。馬志翔監督によると「嘉義に着いたら起こしてくれ」は、実際に流行した言葉なのだそうです³⁷。プロデューサーである魏徳聖は、映画公開後に実在する錠者氏本人も従軍し、戦地で亡くなったということを伝えられたという。魏徳聖は、雑誌のインタビューで、「錠者の氏名や甲子園の戦績は事実ですが、性格や台湾に立ち寄ったエピソードはみなフィクションで、あの時代を濃縮させたキャラクター³⁸」であると語っている。プロデューサーの意図は不明であるが、歴史映画という立場から、プロデューサーの主観で台湾の軍事動員についても口述を取り入れながら触れられている。

さらに、エンドロールでは、先に述べた1931年準優勝メンバーの中で日本人選手が2名戦死していることも触れられている。

実際に1931年の準優勝メンバーで戦地に行った者は、8番バッターでセカンドの川原信夫（日本人）と9番バッターでライトの福島又男（日本人）の2名である。2名とも嘉農卒業後、台湾の公的機関に勤務するが太平洋戦争で招集され、南洋で戦死している。映画のエンドロールで、「鉄壁」川原信夫、卒業後嘉義出張所に勤務、「銅牆」福島又男、卒業後台南州庁に勤務。2名とも太平洋戦争勃発後、召集され、川原信夫、福島又男ともに南洋で戦死」と紹介されている³⁹。

「鐵壁」川原信男，畢業後任職嘉義出張所；
「銅牆」福島又男，畢業後任職於台南州廳，
兩人於太平洋戰爭爆發後被徵召入伍。

川原信男、福島又男，戰死於南洋。

（映画のエンドロール^{40）}

映画『KANO』では、1930年代から戦争末期1944年までの統治時代の様子を表記や街並みといった描写でわかりやすく表現している。また、日本兵が汽車に乗り南へ向かう様子や、台湾人が日本兵として戦争に取り込まれていく姿もわずかな尺であるが描かれ、軍事動員にも触れている。映画から野球人の戦争動員を明らかにすることは困難であるが、準優勝メンバーに戦没者がいたことから、今後の課題として野球人の軍事動員を継続して調査を続ける。

おわりに

1930年代の台湾での出来事で人々の記憶に残っているものの1つは、霧社事件である。霧社事件が起こったのは1930年であり、その翌年の1931年は嘉農が甲子園で栄光に輝いた年だ。前述した台湾での批評の中で「KANOを撮って、セデック・バレを忘れたのか。」というものがあつたが、それはKANOが準優勝した1931年のたった1年前に台湾統治史上最も悲惨な出来事が起き、1年後には台湾野球界で最も輝かしい栄光が起きていたからであろう。この戦前台湾の最も輝かしい栄光は台湾映画『KANO』として制作された。では映画で語られる嘉農の記憶とはどのようなものであつたのだろうか。

まず第1章の台湾映画『KANO』の語りである。プロデューサーである魏徳聖は、この時代の嘉義について聞き取り調査でこのような回答をしている。

西元1930年至1935年是台灣歷史最黃金的時代，而1930年至1931年前後，則是嘉義最美的歲月。當時的嘉義地區嘉南大圳剛開發，而嘉義的中央噴水池在此時也商業最繁榮的地區，更是辦理活動的

集散地。⁴¹

1930年から1935年までは台湾歴史の最も輝いていた時代である。また1930年から1931年前後は嘉義にとって最も素晴らしい歳月であった。当時の嘉義地区は、嘉南大圳の開発が始まり、嘉義中央噴水周辺は、商業が最も繁栄していた地区であり、政府関係機関も集まっていた。

魏徳聖はそのような嘉義を舞台にした『KANO』を‘嘉農’、‘日本語’、‘三民族混成’、‘八田與一’という4つのキーワードを用いて描いている。魏徳聖のいう嘉義地区の最も素晴らしい歳月の1つの要因である嘉南大圳は八田與一を登場させることで、映画の中に日本統治時代の歴史を自然に描いている⁴²。

4つキーワードの中で特に注目されるのは、‘三民族混成’である。‘三民族混成’という言葉は映画の要所で登場している。野球を通して民族を超えた友情を描いた映画としても評判となった。それは映画の中だけではなく、嘉義大学の口述研究の中でも度々登場する。しかしそれらの多くは、‘三民族混成’という言葉での登場のみに限られる。‘三民族混成’を謳っているが、それは同じチームで共に練習をし、三民族が集まる珍しいチームであったということのみを指している。‘三民族混成’が嘉農野球部の歴史の中でも特に重要なことであるといえるのだが、その中身は十分に解明されているとはいいがたい。実際の選手間同士の日常エピソードなどは口述の中で記されているが、その中ではやはり投手の呉や原住民選手との記憶が多くを占め、日本人についての記述は少ないと感じる。

台湾映画『KANO』の語りとは、野球映画の中にも歴史的要素を凝縮し、1930年代から1944年の戦争末期までの嘉義の様子を描写し、後世に歴史を伝えていくことのできるものだ。

この映画の語りをもう少し掘り下げていくなかで、筆者は映画の中の統治、軍事動員という点に着目した。軍事動員に関わるシーンは、3時間を超える映画の中でわずか5分程である。この5分の表す意味は大いに重要である。

第2章で指摘した霧社事件に関する描写と同時に、軍事動員に関して日本の戦争へ協力していく台湾人らが描写されている。また1931年準優勝メンバーでも戦死した者がいるということをエンドロールで付したことによって、甲子園で活躍した台湾チームの選手も戦前の日本野球史と同じように元球児が活躍半ばに出征し戦死するという記録が存在することが明らかになった。

本稿にあたっては、映画の中であまり注目されないであろう軍事動員シーンに注目した。映画の語りという視点から、台湾での軍事動員を明らかにする一助となる研究をすることが目標であったが、本稿では、野球人の軍事動員に関する研究の第一段階であり、映画『KANO』の概要と軍事動員シーンの分析にとどまった。

台湾は日本に比べ、軍事動員が行われたのが遅く、また日本の戦前野球史のような「動員」と

「野球」の2つのキーワードで語られることがあまりない。現時点では、嘉義大学（嘉農）を中心に文献調査並びに名簿調査を行ったが、軍事動員に関する記述はわずかであった。ただ、近年では、語りとして現在も御存命の元学徒兵による記憶も残されつつあるので、今後はそれらを参考として台湾の野球人、スポーツ選手における軍事動員に関して、実際、嘉義地区での調査を予定し進めていく。

- ¹ 湯川充雄編『台湾野球史』によると、明治30年代末にはすでに台湾の各地で野球が行われていたという。その後一時衰退するが、大学野球の経験者が次々に台北にやってきて、野球人気は増していった。1914年に北部野球協会が設立され、台湾野球が本格的にスタートした。甲子園へは、大会開始8年目にしてようやく参加することになった。川西玲子（2014）『戦前外地の高校野球』彩流社pp. 37-57より抜粋して引用。
- ² 日本統治下の台湾で1930年に起こった原住民セデック族の抗日反乱、霧社事件を描いた映画である。
- ³ 映画「KANO～1931海の向こうの甲子園」公式HP（<http://kano1931.com/news.html>）参照。2015年10月19日閲覧。ただし、最優秀作品賞などにもノミネートされながら無冠に終わったことには、中国の影があったのではとも言われる。
- ⁴ 台湾での映画評は様々である。‘日本と台湾の魅力が詰まった映画であった’や‘感動した’という意見が多くある一方（特にインターネット上では感動が拡散された）、日本時代を美化しているという意見や、本文中でも紹介しているが、KANOを撮ったことで、セデック・バレを忘れたのか、などという意見もあった。一方日本では、2014年3月に行われた大阪アジア映画祭で海外初上映され、スタンディングオベーションが続いたといわれる。
- ⁵ 早坂隆（2014）『戦場に散った野球人たち』株式会社文藝春秋p. 13。
- ⁶ 同上 早坂（2014）pp. 10-36参照。
- ⁷ 山室寛之（2010）『野球と戦争』中央公論新社p. 86。
- ⁸ 川西玲子（2014）『戦前外地の高校野球』彩流社p. 4。
- ⁹ 本稿のメインは映画『KANO』であるため、本稿ではこの3冊を主だって参考とはせず、今後の研究のための参考文献としての紹介にとどめたい。挙げた3冊については、林勝龍「日本統治下台湾における武士道野球の受容と展開」（早稲田大学大学院 審査学位論文 博士（スポーツ科学）2012）p5の中で日本人による研究成果として紹介されており、参考とした。
- ¹⁰ 同上 川西（2014）pp. 39-40。
- ¹¹ 蘇正生（1912-2008）1931年の準優勝メンバーの1人 2番センター テニス部から抜擢され野球部へ入部。映画の中で登場する選手の中では一番の長命であり、魏徳聖は蘇正生の口述を参考にしている。
- ¹² 〈映画『KANO』あらすじ〉日本統治下の台湾。南部の嘉義で会計の仕事に就いている近藤兵太郎は、四国の強豪、松山商業野球部の元監督だが、嘉義農林学校に創設された野球部の指導を請われながら断り続けていた。しかし、ある日偶然、嘉義野球部の試合を目にし、未熟だが素質を秘めた若者たちの姿に心を動かされ、指導を引き受ける。一度も試合に勝ったことのない部員たちに近藤は「俺がお前たちを甲子園に連れていく」と宣言、厳しい指導を開始した。また、陸上部の俊足のマラソン選手や、目の前に飛んできた打球をラケットで打ち返した剛腕のテニス部員などをスカウトし、3民族混成チームを作り上げた。打撃力のある台湾人（漢人）、足の速い台湾原住民、守備に長けている日本人。

そして迎えた1931年夏の甲子園大会の台湾地区予選となる全島大会。嘉農は初戦で呉明捷（アキラ）の完封によってチーム初勝利を飾った後、善戦を重ね、決勝戦で常勝チームの台北商業を打ち負かした。南部の学校として初めて優勝旗を持ち帰った彼らを待っていたのは、市を挙げての大祝賀パレードと、水利

技術者の八田興一が10年かけて完成させた嘉南大圳の鳥山頭ダムから放たれた水が田畑を潤す光景だった。

はるばる海を渡って甲子園の土を踏んだ嘉農は、開会式では大観衆に圧倒されたが、神奈川商工との初戦で並はずれた実力を見せ、無名のチームから一躍注目のチームとなった。2回戦の札幌商業との戦いでは、相手のピッチャーを完全に打ちのめした。マスコミをくぎ付けにし、慣習を熱狂させながら嘉農は決勝戦へと勝ち進んだ。甲子園を埋め尽くした大観衆5万人が固唾をのんで見守り、台湾の人々がラジオの実況放送に耳を傾ける中、中京商業との決勝戦が始まった。血に染まったボールを、滑り止めのために傷口に土を擦りつけて必死で投げるアキラ。近藤はピッチャーの交代を考えるが、「最後まで投げさせてください」と頼むアキラと、その気持ちを汲んだ仲間たちの「直球を投げて打たせろ。俺たちが捕る」の言葉に応え、続投させることを決断。それからの嘉農守備陣は、そんな打球にも「いらっしやいませ!」と食らいつき、一球も捕りこぼさなかった。惜しくも優勝を逃したものの、決して諦めずに最後まで戦い抜いた彼らに、スタンドから「天下の嘉農!」と讃える声が起こり、たちまち大合唱となった。嘉農野球部は海を越えて大きな感動をもたらした、甲子園の歴史に偉大な足跡を残したのだ。

*『KANO—カノ—1931海の向こうの甲子園』パンフレット アイ・プランニング 東急レクリエーション映像事業部プロモーション企画部より2015年5月12日付であらすじ引用許可取得済み。

- ¹³ 同上 パンフレット アイ・プランニング 金原由佳レビュー「アジア映画史に加わった新たな1ページ」より。
- ¹⁴ 謝仕淵2012『国球 誕生前記 日治時期台湾棒球史』pp. 151-153。
- ¹⁵ 同上 パンフレット アイ・プランニング p. 16 インタビュー ウェイ・ダーション【プロデューサー／脚本】より。
- ¹⁶ 嘉南農田水利會 (<http://www.chianan.gov.tw/>) 2015年10月19日閲覧、参照。
- ¹⁷ 同上 パンフレット アイ・プランニング p. 22歴史的背景 [5]「KANO」甲子園への道 春山明哲 (早稲田大学アジア研究機構台湾研究所 客員上級研究員)
- ¹⁸ 八田興一：27分50秒のシーンである。
- ¹⁹ 原住民語：21分36秒 ただし(原住民語)の表記が確認できたのは、台湾版ブルーレイのみである。
- ²⁰ 1896年、日本人と台湾人の通訳養成と国語伝習所の教員養成をするために開設された。
- ²¹ 日本統治時代の台湾における台湾人子弟のための教育機関。日本人子弟へは別に小学校が開設されていた。
- ²² 原住民に対する教育を行った機関である。
- ²³ 『嘉農人』第12号 台湾嘉農校友会、台湾嘉大校友会(1997-) 甲子園第90回大会記念号 及び国立嘉義大学蘭潭校区KANO特展、展示より筆者作成。映画では、補欠以外は全て実在の人物で描かれた。
- ²⁴ 「アサヒスポーツ」1931年8月29日印刷納本 第9巻 第18号。
- ²⁵ ①1930年前後嘉義市内1：10分32秒
②1930年代嘉義市内2：1時間36分48秒
③1944年嘉義市内1：1時間53分18秒
④1944年嘉義市内2：1時間53分35秒
- ²⁶ 1931年甲子園：嘉農準々決勝の対戦校札幌商業のエースピッチャー(実在の人物である)。
- ²⁷ ①嘉義駅ホーム1：1時間52分46秒
②嘉義駅ホーム2：1時間52分48秒
- ²⁸ 中時電子版 (<http://www.chinatimes.com/newspapers/20140221000657-260112>)「魏德聖：帶刺看不到仇恨化解」2015年10月16日閲覧。
- ²⁹ 近藤正巳(1996)『総力戦と台湾-日本植民地崩壊の研究』刀水書房p. 351。
- ³⁰ 同上 近藤正巳(1996) p. 362。
- ³¹ 宮崎聖子(2006)「元台湾人特別志願兵における「植民地経験」」宮崎聖子 戦後台湾における〈日本〉植民地経験の連続・変貌・利用』五十嵐眞子・三尾裕子編 風響社 2006 p. 65。
- ³² 1942年に戦意を高めることを目的として、「全国中等学校体育大会野球大会」が開催された。前年の1941

年の第27回大会は、予選は行われたが、戦争の影響で中止となった。「全国中等学校体育大会野球大会」は文部省と大日本学徒体育振興会の主催で開催され、戦争のさなかで、戦意高揚の目的の大会であったため、大会の回数継承、優勝旗授与が認められなかった。この1942年の大会を幻の甲子園と呼ぶ。

³³ 同上 川西（2014）p. 215。

³⁴ 命部隊は第71師団に属していた。第110師団の歩兵140連隊を基本としている。第71師団は、満州で南方進出に向け、訓練に励んでいたが満州から台湾に転進し終戦を迎える。1945年に第10方面軍に編入されて、台湾に転用された。台湾に上陸してからは、台中付近の陣地構築にあたっていたが、終戦を迎える。

〈第71師団司令部略歴〉

1945. 1. 25 満州出発

↓

2. 19 台湾基隆港上陸

↓

2. 20 台南州斗六到着 台中州大甲溪以南台湾州八常溪に渡る地域の防衛作戦準備

↓

1946. 1. 1 復員下令

↓

2. 26 台南州斗六出発

↓

3. 1 台湾基隆港出発

↓

3. 6 広島県大竹港上陸

↓

1946. 3. 7 復員完了 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C12122490300、「中央一部隊歴史全般－88」（防衛省防衛研究所）

〈第71師団における動き－歩兵第87連隊および歩兵第88連隊の資料より－〉

満州で編成されたため、台湾に上陸する前は、華北の作戦に参加していた。台湾北東部の基隆に上陸後、台南州（第87連隊）および、台中州（第88連隊）に駐留し任務を遂行する。台湾に転進して以来、マラリア患者が多数出た。終戦後は隊毎に駐屯地において、現地自活（主農耕）を行っていた。歩兵第88連隊においては、戦災都市の復興を実施していた。旭川師管区から補充されたため、北海道出身者が多かった。

³⁵ 劉萬来（2015）『一個老KANOの回憶：大林之子劉萬来自叙』魚籃文化有限公司p. 111。

³⁶ 『嘉農人』第5号 台湾嘉農校友會、台湾嘉大校友會（1997－）蘇正生口述より引用 蔡武璋整理。蔡武璋は本口述を「嘉農棒球隊台灣棒球發展的意義」『嘉義市文獻22』嘉義市政府（2014）p. 75でも引用している。（日文は筆者の訳による）

³⁷ ROCKET NEWS24（<http://rocketnews24.com/2014/12/26/523248>）知っておくと映画がもっと楽しくなるかも！日本と台湾で大感動を巻き起こした甲子園映画『KANO』の秘密 5選2015年9月24日閲覧。

³⁸ 浦川留（2015）『キネマ旬報』pp. 118-122。「KANO～1931海の向こうの甲子園～」対談プロデューサー魏徳聖×監督馬志翔 あきらめないところより参照。

³⁹ 現在、日本では戦没者について靖国神社内、偕行文庫で調べることができる。筆者は、台湾における野球人の軍事動員の手がかりになると考え、実際に、偕行文庫に依頼をして川原信夫と福島又男の戦地での様子の調査を試みた。本名と本籍は、嘉義大学蘭潭校区秘書室の協力を得て『國立嘉義農業專科學校 歷屆畢業生通訊錄』（國立嘉義大學農業科學校實習就業轉導室編印 1989年11月30日）を参照とした。

偕行文庫での調査によると、現在までに保管されている資料等の中に、2名の名前と本籍が合致するものはなかった。川原信夫については『國立嘉義農業專科學校 歷屆畢業生通訊錄』に記載されている本籍住所とは異なる本籍地の同姓同名の人物はいるが、本籍地が異なる以上、確証がないため公開不可となつ

た。福島又男については、名前が見当たらなかった。1931年準優勝メンバーで動員された2名から、手がかりを得ようと試みたが、失敗に終わった。また嘉義大学に残されている他の資料でも2名の動員に関する記述がみられない。しかし映画のエンドロールでは、2名の具体的な卒業後の進路（嘉義出張所、台南州廳）は明記されているので、今後、プロデューサー魏徳聖への聞き取り及び日本国内での調査に期待したい。

⁴⁰ 映画のエンドロール：2時間55分14秒

⁴¹ 「『KANO』 棒球電影拍攝二三事」『嘉義市文獻22』嘉義市政府（2014）魏徳聖口述 李明仁訪談 黃慧鈴整理 *日本語訳は筆者によるものである。

⁴² 嘉農は、現在に至るまで後身の嘉義大学において卒業生への口述研究が盛んに行われている。主なものとしては、台湾嘉農校友会、台湾嘉大校友会が出版している、『嘉農人』（1997-）、国立嘉義農業專科学学校校友会が出版している『嘉農口述歴史』（1993）、国立嘉義大学台湾文化研究中心出版の『嘉大口述歴史一日治時代』編（2007）や『嘉大口述歴史一師範大学』編（2008）などがある。最新のものでは、嘉義農林KANO棒（野）球部OB会出版の『永遠的嘉義農林／嘉義大学 KANO棒（野）球魂』（2014）や劉萬来『一個老KANO的回憶 大林之子劉萬来自叙』（2015）などがある。また、最近の活動としては、台湾口述歴史学会と国立嘉義大学人文芸術学院主催で、「2015棒球口述歴史研習營⁴²」が2015年4月24日に国立嘉義大学蘭潭校舎で行われた。これは、学生と社会人向けに口述歴史の理論の理解を深めるために実施された。参加者は国内外より34名であり、当日は嘉農野球部OBを招いての実践練習も行われた。嘉義大学はこうした取り組みも積極的に行い、嘉農、そして野球部の甲子園の歴史を語り継いでいる。映画『KANO』の公開に先駆けても当時の嘉農の偉大な歴史を残し、語り継ぐために、大学内に特別展示を設け、一般向けにも見学の窓口を設けている。



（嘉義大学KANO特展／筆者撮影2015年4月23日）



（嘉義大学KANO特展／筆者撮影2015年4月23日）

参考文献

- アイ・ブランニング (2015)『KANO—カノー1931海の向こうの甲子園』パンフレット 東急レクリエーション
- 浦川留 (2015)『キネマ旬報』「KANO～1931海の向こうの甲子園～」対談プロデューサー魏徳聖×監督馬志翔
- 黄敏惠 (2014)『嘉義市文献22』嘉義市政府、嘉義市政府文化局
- 川西玲子 (2014)『戦前外地の高校野球』彩流社
- 国立嘉義大學農業科學校實習就業轉導室編印 (1989)『國立嘉義農業專科學校 歷屆畢業生通訊錄』國立嘉義大學
- 近藤正巳 (1996)『総力戦と台湾 - 日本植民地崩壊の研究』刀水書房
- 蔡崇文 (1993)『嘉農口述歴史』国立嘉義農業專科學校校友会
- 蔡崇文 (1997～)『嘉農人』台湾嘉大校友会
- 蔡武璋 (2014)『永遠的嘉義農林／嘉義大学 KANO棒(野)球魂』嘉義農林KANO棒(野)球部OB会出版
- 謝仕淵 (2012)『国球 誕生前記 日治時期台湾棒球史』國立臺灣歷史博物館
- 周婉窈 (2007)『図説 台湾の歴史』石川豪、中西美貴訳 平凡社
- 早坂隆 (2014)『戦場に散った野球人たち』株式会社文藝春秋
- 山室寛之 (2010)『野球と戦争』中央公論新社
- 宮崎聖子 (2006)「元台湾人特別志願兵における「植民地経験」」『戦後台湾における〈日本〉植民地経験の連続・変貌・利用』五十嵐眞子・三尾裕子編 風響社
- 李明仁 (2007)『嘉大口述歴史—日治時代』編 国立嘉義大学台湾文化中心
- 李明仁 (2008)『嘉大口述歴史—師範大学』編 国立嘉義大学
- 劉萬来 (2015)『一個老KANO的回憶：大林之子劉萬来自叙』魚籃文化有限公司
- 林勝龍 (2012)「日本統治下台湾における武士道野球の受容と展開 The infusion and popularization of Japanese Samurai baseball culture in Taiwan during the period of Japan's colonization」早稲田大学 スポーツ科学研究科 博士論文

(研究紀要編集部は、編集発行規程第6条に基づき、本原稿の査読を審査委員に依頼したところ、審査委員から掲載可とする判定があったので受理した。2015年12月10日付)